



令和8年7月14日
第3号

酒田農業技術普及課
TEL 22-6521

6葉期になりました。生育は順調です！ 大型化する雑草は今のうちに抜き取りましょう！

I 生育は順調、湿害と開花期の干ばつに注意！

今年は播種期間が好天に恵まれ、播種後は断続的な降雨で初期の生育は順調です。今後、週間天気予報には雨の予報も出ています。今一度圃場の排水対策を確認し、湿害を回避できるようにしましょう。また、大豆は開花期～登熟初期に多量の水を必要としますので、降雨の見込みがなく、土壌表面に白乾亀裂が生じる場合は、開花期10日前頃から畝間灌水か明きょへの一時湛水で土壌水分を確保しましょう。

間もなく開花期を迎えます。表を参考に、病虫害防除の適期判定に必要な開花期を把握しておきましょう。なお、開花期は「全株数の40～50%が開花始めに達した日」です。

【管内の品種別開花期(平年)】

品 種	開花期
エンレイ	7月25日頃
里のほほえみ	7月30日頃

II 2回目培土の実施

1回目の中耕培土は6月27日が盛期、7月3日が終期でしたが、6～7葉期に達している圃場では**2回目の培土時期**を迎えています。培土は根域の拡大など種々の効果が期待できます。確実に実施して、高品質大豆の安定多収を目指しましょう。生育が遅れている圃場でも、6葉期になったら遅れずに培土を実施することが大切です。2回目の培土は、初生葉が隠れるくらいまで土を寄せるようにしてください。

また、生育量が十分でない圃場では、培土作業の直前に追肥を行うことが生育量増大に効果的です。なお、排水不良が原因の場合は、**排水対策を徹底**した上で実施してください。

(例)「LPコート70」(緩効性)を20kg(N成分8kg)/10a、または「尿素」(速効性)を10kg(N成分4kg)/10a全面散布し、その後培土を実施します。

III 子実病虫害防除 (今年の1回目の防除適期は 8/20～30)

薬剤散布時期の判断には、開花期の把握が必要です。

「紫斑病」: 防除適期は開花後25～35日の間、薬剤は莢に付着するよう丁寧に散布します。

「マメシクイガ」: 1回目は8月25日頃に紫斑病と同時防除を実施すると効率的です。さらに、その10日後(9月5日頃)に2回目の防除を実施します。

対象病虫害	防除時期	
紫斑病	開花後25～35日頃	
マメシクイガ	①8月25日頃(産卵盛期)	②1回目の10日後



紫斑粒



マメシンクイガ成虫



マメシンクイガの被害莢・子実

IV アブラムシ類の吸汁害や食葉性害虫の被害

【吸汁性害虫】

ジャガイモヒゲナガアブラムシは、8月以降急激に増加することがあるので、注意して観察し、発生・被害が見られたら、被害が拡大する前に、薬剤を葉裏にもかかるよう丁寧に散布します。



【食葉性害虫】

ハスモンヨトウは、幼虫の齢期が進むと防除効果が低下するため、若齢幼虫期に薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布します。台風や低気圧の通過に伴い、多飛来することがあるので、圃場をよく見回り、早期発見に努めましょう。

その他にもツメクサガ、マメハンミョウなどは、発生初めに圃場の一部分を集中的に食害する傾向があるので、発生を確認したら周囲に広がる前に部分的な薬剤散布を実施することも効果的です。



ハスモンヨトウの幼虫



ハスモンヨトウの被害葉



マメハンミョウ

V これからの雑草対策

タデ類、オナモミ、シロザ等の大型化する雑草は今のうちに抜き取りましょう。また、帰化アサガオ類は、数が少ないうちに抜き取りましょう。特に、**実(種子)が付く前に抜き取る**ことで、来年以降の発生を減らすことができます。また、除草剤を使用する場合は、ラベルをよく読んで適正に使用しましょう。



夏は熱中症に注意

- ☑ 作業は涼しい時間帯に
- ☑ 定期的に休憩を

定期的に水分と休憩を取りましょう

- ☑ 塩分と水分をこまめに補給
- ☑ 作業は涼しい服装で

